

## < 研究ノート > :

### 1 . 進化するオーストラリアのスポーツ研究

尾崎 正峰

#### 1 . 「スポーツ大国」とスポーツ研究のギャップ

##### ( 1 ) 「スポーツ大国」オーストラリア

「スポーツ大国」「スポーツ天国」と称されるオーストラリアに興味を示し、実際にオーストラリアに出かけてスポーツをエンジョイしようとする人々は後を絶たない。スキューバ・ダイビングなどの大自然の中での異次元体験、ゴルフ・コースの格安料金、マリン・リゾート地でのサーフィン等、多くの人を惹きつける魅力をオーストラリアのスポーツは持っている。それゆえ、航空会社のカウンターで自前のゴルフ・バッグやサーフ・ボードを機外預かり荷物とするべく手続きをする人々の列が、空港での一つの風景になっているといっても過言ではないであろう。

オーストラリアという国の中で暮らしてみれば、「スポーツ大国」「スポーツ天国」という言葉に嘘はないことは実感できる。かつて、植民地として支配したイギリスの人々が、一年中降り注ぐ陽光をまぶしく見つめ、一年を通して青々とした芝生のフィールドでスポーツができることを賞賛してから 200 年以上の時を経過した現在、「する」スポーツをめぐる環境は世界の中でもトップクラスといってよい。

「する」スポーツの展開のみならず、「見る」スポーツの隆盛にも目を見はるものがある。

大規模な競技場の立地がシドニーをはじめとする大都市に偏在しているとはいえ、そこで開催されるゲームには多くの観客が集まり、熱い声援を送っている。クラブ経営も利潤を求める傾向が強くなり、選手のプロ化の波が世界を席卷している

現代にあっては、都市・地域とクラブの関係は以前と比較すれば様変わりしたことは否めない。そのことを勘案しても、今もって各クラブ・チームは、それぞれの都市・地域を活動の根城として意識せざるを得ず、クラブを支えるメンバーやファンたちにとっても「おらが街のチーム」という気持ちは保っている部分もある。

そして、競技場に足を運ぶ人々の数を遙かに上回るのがテレビの視聴者である。

スポーツ専門のペイ・テレビ局は言うに及ばず、休日ともなれば、一般の地上波テレビ局ですら、早朝から夜にかけて、ほぼぶっ通しでスポーツの試合の中継をしている<sup>(1)</sup>。テニスなどの“メジャー”な種目はもちろんのこと、ネットボールというオーストラリア独特の女性スポーツなど多種多様な種目が目白押しである。なにしろ、オーストラリアには、フットボールと一口に言っても、オーストラリアン・ルールズ、ラグビー・リーグ、ラグビー・ユニオン、そしてサッカーと、4 種類に上る。「世界標準」ではないオーストラリアン・ルールズに多くの人々が熱狂する姿は、外側から見るとっては不思議に映る光景である。

このほか、クリケットの中継が目立って長いのは、Commonwealth (英領連邦) の一員というお国柄にふさわしいというべきか。クリケットの人気の高さは、クリケットの平たいバットを抱えて住宅街のそばにあるグラウンドに出かけ、仲間とクリケットに興じる少年たちの姿が絶えることがないことにも示されている。

##### ( 2 ) 「遅れて出発した」スポーツ研究

文字通りの「スポーツ大国」オーストラリア。

イギリスの植民地時代からスポーツが盛んに行われ、スポーツはオーストラリアの生活と文化に深く根ざしていると言われる。

しかし、スポーツに関する研究、とくにスポーツ社会学の領域における研究は、社会におけるスポーツそのものの歴史の長さや深さに比して、わずかな歴史しか有していないのが現実である。

1980年代初頭、当時のオーストラリア(および、ニュージーランド)におけるスポーツ研究を概観したK. Pearson と J. McKay の2人の研究者は、社会学の領域におけるスポーツに対する関心の欠如について、次のように述べている<sup>(2)</sup>。

「S.A.A.N.Z. (オーストラリア・ニュージーランド社会学会 = 筆者注) のメンバーの中で、レジャー、スポーツ、レクリエーションや芸術に興味を持っているものとしてリストアップされているのはわずか16名にすぎない。」

はたまた、次のようにも言う。

「1965年に発行した *Australian and New Zealand Journal of Sociology* において、1965年から1978年までの間で、スポーツに関する論考はたったの2編であり、しかも、それはどちらも書評でしかない。」

このように、社会学の領域におけるスポーツへの関心の低さを嘆じているが、この点に関して、しばらく後に表明された Richard Cashman による言及を見ると、「スポーツに関する研究は、比較的最近の現象である」として、1984年の Brian Stoddart 著の *Saturday Afternoon Fever*<sup>(3)</sup> を、「オーストラリアのスポーツの歴史を学問的に描く最初の試み」であると位置づけている<sup>(4)</sup>。

以上、3人の研究者によるオーストラリアにおけるスポーツ社会学、およびスポーツ研究の総括を見てきたが、こうした評価は他の研究者においても同様のものであるといえる。このことからするならば、オーストラリアにおいては、社会学の中のスポーツ社会学の位置づけの低さという問題に留まらず、スポーツの社会科学的な研究全般が「遅れて出発した」ということができる。

## 2. オーストラリアにおけるスポーツ研究の展開

前項で見たように、「遅れて出発した」オーストラリアにおけるスポーツ研究であるが、1980年代後半以降、現在に至るまでの研究動向を概観すると、状況は少しずつ変化しながら推移してきているように思われる。

オーストラリアにおける社会科学的なスポーツ研究の本格的な展開は、スポーツ史の領域から始まった。それを象徴するものが、1984年の *Sporting Traditions* の発行である<sup>(5)</sup>。オーストラリアスポーツ史学会 (The Australian Society for Sports History) の研究紀要としての位置づけをもつ同誌(季刊 = 年4回発行)は、その名の通り、歴史的な事象やテーマに関する論考を数多く掲載すると同時に、現代的な対象に関する論文の発表の場ともなっていた。スポーツ史の領域では、このほかに、個別の地域、スポーツクラブの歴史の掘り起こしに取り組み、数多くの編纂資料としてまとめていく作業が継続して行われた。

スポーツ史の展開に歩調を合わせるかのように、1980年代後半から、少しずつオーストラリアのスポーツを研究対象とする専門書が公刊されてくるようになった。そして、1990年代に入ると、その数は増加し、テーマや対象領域も広がりを見せてきたとすることができる。

1980年代後半以降は、同時に、ヨーロッパにおけるいわゆる「批判的スポーツ社会学」の影響を受けて研究を展開する潮流も起こった時期でもある。この潮流に属するととらえられる研究者たちの最近の傾向を言えば、カルチュラル・スタディーズ等の成果を受け入れながら精力的に研究を進めてきている<sup>(6)</sup>。

ここまで、オーストラリアにおけるスポーツ社会学、およびスポーツの社会科学的な研究の動向について、時間的な流れに基づいて紹介してきたが、次に、オーストラリアのスポーツに関する「百科事典」ともいえる *The Oxford Companion to Australian Sport*、および *The Oxford Book of*

*Australian Sporting Anecdotes* <sup>(7)</sup>を参照し、同時に、これまでに刊行された研究書を概観する中から、オーストラリアにおけるスポーツ研究のテーマ、ないしはキーワードを取り出してみると以下のようなになる<sup>(8)</sup>。

- ・ナショナリズム
- ・多文化主義
- ・アボリジニー
- ・移民
- ・エスニシティ
- ・ジェンダー
- ・アマチュアリズムとプロフェッショナリズム
- ・グローバリゼーション
- ・メディア
- ・ビッグ・ビジネスとしてのスポーツ
- ・ポピュラーカルチャーとスポーツ
- ・オリンピック

これらからは、イギリスの植民地、国家としての独立、その後の「白豪主義」の時代を経て Multiculturalism (多文化主義) へと移り変わってきた歴史を持つオーストラリアであればこそ有しているさまざまな問題と同時に、世界的に共通する課題を研究テーマとして取り上げられている状況を見て取ることができる。

ここで、2000年に開催されたシドニー・オリンピック大会について見てみれば、オリンピック開催はスポーツのみならずオーストラリアの社会に大きな変化をもたらしたといえる。オーストラリアは、すでに1956年にオリンピックを経験しており(メルボルン大会)、その歴史的な位置づけに関する研究も出されているが<sup>(9)</sup>、今回のシドニーのそれは、オリンピックそのものの変容に加えて、グローバリゼーションが進む世界情勢、および、高度情報社会にともなうメディアの発達といういくつかの要因が折り重なることによって、ほぼ半世紀前のオリンピック大会とは比べものにならないほどのインパクトを与えたと考えることができる。シドニー・オリンピックに関わる研究は、すでに大会の前後においていくつか公にされているが<sup>(10)</sup>、今後とも、さらにさまざまな研究成果が公

表されてくると思われる。

以上から見る限り、「遅れて出発した」オーストラリアのスポーツ研究も、現在においては、オーストラリアの社会と文化に特有なテーマを含めて、さまざまな課題を対象として展開してきているといえることができる<sup>(11)</sup>。

おわりに

昨年度の本研究年報において提起したクイーンズランド大学における在外研究での研究課題のうち、最後の5つ目の柱となる「オーストラリアにおけるスポーツ社会学の研究動向」について、その概観を試みた。

日本においては、この分野における先行研究はほとんどなく、その意味でも手探りの部分があり、サーヴェイし切れていないものもあると思われる。また、個別のテーマについて掘り下げるべき作業課題があることも自覚している。これらの点を含めて、オーストラリアにおけるスポーツ社会学、スポーツの社会科学研究のより精緻な把握に取り組んでいきたい。

筆者の在外研究の最大のテーマであったオーストラリアのスポーツ政策について、本稿では紙幅の関係で論を展開することができなかった。ここで一言だけふれておくならば、昨年度の研究年報の拙稿においてすでに明らかにしたように、オーストラリアのスポーツ政策、とくに連邦政府がスポーツに積極的に関与するという意味でのスポーツ政策は1970年代以降のことである。こうした実態を反映して、スポーツ政策研究もこの時期以降に出発したといえることができる。この点についての全体的な整理は他日を期したい。

また、2000年のシドニー・パラリンピック大会で示されたように、オーストラリアの「障害者スポーツ」の展開は注目されるものである。筆者も資料収集などの実態把握を行ったが、今回、障害を持つ人々のスポーツについては、まったくふることができなかった。この点についても、別の機会で取り上げたいと考えている。

<注>

(1) 日本中を席卷した 2002FIFA ワールドカップは、オーストラリアでは SBS という地上波テレビ局がほぼ全試合を放送していた。したがって、テレビをつければ、誰でもすべての試合を簡単に見ることができたのである。「ユニヴァーサル・アクセス」の問題が、オーストラリアにおいてどのように論じられたのか、明らかにすることはできていないが、ルパート・マードックの故郷の国、そして彼の戦略のターゲットとなっているオーストラリアにおいて、メディア・コンテンツとして現在もっとも高く評価されるものの一つであるサッカー・ワールドカップが無料放送で視聴できたことは、「スポーツ大国」に住む人々の存在とその大きさを無視できなかった結果と思われる。

(2) K. Pearson and J. McKay, 'Sociology of Australian and New Zealand Sport: State of the Field Overview', *The Australian & New Zealand Journal of Sociology*, Vol.17, No.2, 1981, p.66.

(3) Brian Stoddart, *Saturday Afternoon Fever: Sport in the Australian Culture*, Angus & Robertson, 1986.

(4) Richard Cashman, *Paradise of Sport: The Rise of Organised Sport in Australia*, Oxford University Press, 1994.

(5) Ibid., Preface.

(6) 代表的な著作としては以下のものがある。

その他、後述の注(8)も参照。

\* Geoffrey Lawrence and David Rowe (eds.), *Power Play: The Commercialisation of Australian Sport*, Hale & Iremonger, 1986.

\* Jim McKay, *No Pain, No Gain: Sport and Australia Culture*, Prentice Hall, 1991.

\* David Rowe, *Sport, Culture and the Media*, Open University Press, 1999.

(7) *The Oxford Companion to Australian Sport (Second Edition)* 1994. *The Oxford Book of Australian Sporting Anecdotes*, 1993. とともに、Oxford University Press 刊。

(8) 本文の中であげたテーマ、キーワードに関連する研究成果として以下のような著作がある。

\* Colin Tatz, *Aborigines in Sport: The Australian Society for Sports History*, 1987.

\* Marion K. Stell, *Half the Race: A History of Australian Women in Sport*, Angus & Robertson, 1991.

\* John O'Hara (ed), *Ethnicity and Soccer in Australia*, ASSH Studies in sports History, 1994.

\* P. A. Moosely, R. Cashman, J. O'Hara, and H. Weatherburn (eds.), *Sporting Immigrants*, Walla Walla Press, 1997.

\* Jim McKay, *Managing Gender: Affirmative Action and Organizational Power in Australian, Canadian, and New Zealand Sport*, State University of New York Press, 1997.

\* K. Schaffer and S. Smith (eds.), *The Olympics at the Millennium: Power, Politics, and the Games*, Rutgers University Press, 2000.

\* T. Miller, G. Lawrence, J. McKay and D. Rowe, *Globalization and Sport: Playing the World*, SAGE Publications, 2001.

(9) Geoffrey Ballard, *Nation with Nation*, Spectrum Publications, 1997.

(10) R. Cashman and A. Hughes (ed.), *Staging the Olympics: The Event & Its Impact*, UNSW Press, 1999. および、前掲、K. Schaffer and S.

Smith (eds.), *The Olympics at the Millennium*

(11) 前述した 1980 年代の評者でもあった Jim McKay を含む論者たちが、最近、あらためてスポーツ社会学の現状に対する「評価」を行っているが、現段階においてもスポーツ社会学は「確立」したとは言い切れないとしている。

Jim McKay, John Hughson, Geoffrey Lawrence and David Rowe, 'Sport and Australia society', J. M. Najman and J.S. Western (ed.), *A Sociology of Australian Society (3rd edition)*, Macmillan Publishers, 2000.